

松田家の歴史

「松田家由緒」

相模松田家 22代 松田邦義

松田家の遠祖は藤原鎌足である。鎌足は中大兄皇子と共に乙巳の変(645)を行い蘇我氏を討ち、天皇を補佐し、天智天皇に官位の最高位「大織冠」を賜り、同時に藤原の姓を賜った。

次男不比等は太政大臣となり、正一位を賜った。不比等は藤原の力を強力にし、その子房前は太政大臣となり、藤原北家の祖となった。8代秀郷は平将門の乱を鎮圧した。

鎌足の13代公光の時に相模守となり、神奈川県秦野市近郊に住んだ。一族は秦野市近郊から松田郷を始め足柄郡から箱根に掛けての地域を開拓した。

14代経範は姓を「波多野」に改め、その後波多野遠義の嫡男義通の弟達は其々の本貫地の地名から秀高は河村・実方は広沢・経家は大友・義景は波多野・実経は菖蒲・家通は沼田に姓を改めた。大友氏は九州の大名大友宗麟、波多野氏は永平寺を建立した波多野義重を輩出した。

また、波多野義通の嫡男義常の弟達も次男高義は大槻に改姓し、その弟達、忠綱と義元は其の儘波多野を名乗った。1180年義常は源頼朝に反旗を翻した為領地を没収されるが、1188年4月3日義常の子有常は鎌倉鶴岡八幡宮の流鏑馬で見事な技量を見せ源頼朝の賞賛を受け、亡父所領の松田郷を与えられ、初めて松田有常を名乗り鎌倉殿御家人となった。当時の松田郷は東海道の足柄越ルートと太平洋に注ぐ酒匂川の交差する水陸交通の要衝に位置しており、古来足柄上郡(中井町・大井町・松田町・山北町・開成町)の中心を占めていた重要な地域であった。又、大槻高義の3代目成家(鎌足の22代)は松田郷に住み「松田」を名乗り相模松田家の初代となる。鎌倉時代に一族は相模に残る者や、戦いに手柄を立て備前・出雲・九州等の守護や地頭となって各地に分散していった。

備前松田家は有常の子孫に盛朝がおり、承久3年(1221)承久の乱に髓兵し、その功によって鎌倉幕府より備前の国に領土を賜り、備前国守護となった。

正慶2年(1333)松田元国が南朝方の後醍醐天皇に味方し新田義貞の下で、鎌倉幕府討伐の功により備前国御野郡伊福郡を与えられた。

その後、相模松田家は南朝方だったが、備前松田家は北朝の足利尊氏に味方し、足利氏の家紋「丸に二引き」の使用を許される程であった。

松田家7代頼重は備前松田元成の弟で、北条早雲と共に京都の足利将軍の奉公衆であった。将軍足利義政の命により京より子の頼秀と共に相模に下向し、相模松田家を家督した。

また、備前松田家より足利将軍の近習と奉公衆が20名存在し、8名が偏諱を受けている。

北条早雲の小田原城攻めの時に頼重・頼秀は最大の協力をし、北条家御草創七手御家老衆となり、盛秀は北条家2代氏綱の付家老となった。

9代盛秀と10代憲秀は筆頭家老として敏腕を振るい、家臣として最高の2798貫(松田氏族3922貫)を給されていた。豊臣秀吉の小田原攻めの時憲秀は籠城策を主張し、野戦論の北条氏照・北条氏邦等と論戦を戦わせた。結果的に籠城策がとられ、何千何万という人命を救った事は憲秀の最大の功績である。

11代直秀(四郎左衛門憲郷)は北条氏直の筆頭家老であったが、北条家滅亡後加賀前田家に4000石で召抱えられ、御普請奉行となり、小田原城を参考にして金沢城の惣構を完成させるなど活躍し、子孫も御馬廻役でも高位の定番御馬廻御番頭、検地奉行、武具奉行等を歴任した。

明治時代には金沢市長町三番町一参勤交代の江戸の住い文京区湯島天神の近く一東京市神田区鍛冶町一東京府豊多摩郡中野町(東京都中野区)一八王子市南町と、先祖に引き寄せられるように現在は神奈川県相模原市に移り住んでいる。